第二講

35分

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

過ぎ去った日々や亡くなった人々のことが時折思いもかけず心によみがえる。そのときそうした思い出や面影は何か過去の形見が残されたもののように思われる。それらの日々や人々はもはや二度と戻らないが何かその影のようなものがわれわれの手元に残されている、といったように。ただその影によってわれわれはかろうじて過ぎ去り失われた時とつながっているのだ、と。

つまり今われわれに残されているのは、過去そのものではなくその過去の写しなのだと感じるのである。過去はひとたび去れば再び還（かえ）らない、ただそのいささかの記憶が残留しているだけなのである、と。この、記憶とは過去の出来事や人々の「写し」である、という思いはわれわれの心に深く根づいている。われわれの言葉遣いにもそれは明らかであろう。「記憶に焼き付いている」、「眼に焼き付いている」、「いまだにあざやかな記憶」、「記憶に新しい」、「記憶がうすらぐ」、「(1)<u>アワ</u>い記憶」、「旧（ふる）い記憶」等々、

これらの言い廻（まわ）しにはまぎれもなく「写真」の比喩が下敷きになっている。その時々の印象や体験が人間カメラで写されて頭の中にしまいこまれる、そのアルバムからあの写真この写真がふいと浮かび上がる、新しい写真は(2)ガイして鮮明だが昔のものになるにつれ色はあせ形はぼけてくる。しばしば、あったはずの写真がいくら探しても見つからない、それなのに時には思いもかけなかった写真が浮かび出てわれわれをなつかしがらせる。こういった「写真」の比喩がある。心理学者もまたこの比喩の下に、記憶心像だとか記憶痕跡などを語るのである。

　脳生理学者がこの痕跡を大脳その他の何らかの機構や物質だと考えたくなるのも無理からぬところであろう。だいぶ昔、といっても戦後であったが、面白い実験が話題になったことがある。プラナリア（渦虫）という小さな下等水中動物に条件付け訓練によって電気ショックの方を避け、餌のある方に行かせるようにする。そう訓練したプラナリアを、今度は未訓練の別のプラナリアに食べさせたところ食べた未教育のプラナリアもちゃんと電気を避けて餌に向かった、というのである。この実験はその後確認されなかったようであるが、もしそういうことがあるならば人の爪の垢（あか）を煎じて飲んで利口になるといったことも不可能ではあるまい。それはさておいても、失語症その他記憶障害の研究から脳が記憶の保持や再生に強い関連

をもっていることは今日疑う人はいないだろう。

しかし、脳が記憶に密接な関係をもっているということと、「写し」の比喩が正しいということとは別のことである。私にはA「写し」の比喩には基本的な誤解があるように思える。

ある風景の「写し」、例えば写真であるとか絵であるならばそれは元の風景と同様に眼で見ることのできるものである。それは見えるものとして、見える細部をもっていなければならない。例えばそれが写真であるならばそのどの小部分といえども定まった黒白の濃淡なり色調なりをもっている。つまり、その小部分に着目することができるし、その着目した小部分は特定の濃度なり色調なりをもっている。ところがわれわれが何かの風景を記憶の中に思い浮かべるとき、それがどんなに熟知した風景の場合でもそのように見つめることのできる細部をもっているだろうか。自分の部屋の机の右隅の一点とか、母親の顔の唇の端とかを記憶の中で見つめることができるだろうか。できまい。また、その記憶の中の机や母親の顔を忠実に写生しようとしてみてほしい。それもできないことがわかるだろう。絵の上手な人ならば、それらの記憶から、あるいはそれらの記憶に頼ってその机や母親の顔を画（えが）くことはできよう。しかしそこで画かれた机や顔は本物の机や本物の顔に似せた絵であって、記憶の中に浮かんだ机や顔の写生

ではないことは明らかであろう。

　記憶に浮かんだ風景は眼に見える映像ではないのである。眼でここあそこと見つめることのできる映像ではないのである。残像だとか幻だとか、あるいはイエンシュの言う直観像はその種の映像であるが、記憶に思い浮かべられた風景はそうではない。それは記憶の中の音が今耳に聞こえる音ではないのと同様である。また、昨日の激しい歯の痛みは今なお生々しく思い出されるにせよ幸いなことに今は少しも痛くないのと同様である。痛みの記憶は痛くなく、悲しみの記憶は悲しくはない（その記憶でまた新たな悲しみが誘発されない限りは）。御馳走（ごちそう）の記憶で舌鼓をうつことはできないし、快楽の記憶が快楽であるわけではない。それと同様に、思い出された(3)センリツは今耳で聞こえるものではなく、思い出された風景は今眼に見えるものではないのである。

　一つの風景を「思い出す」ということは、その風景の薄ぼけた映像を眼で見ることではない。もしそれが眼で見える映像であるのならば、私はそれをとにかく私の眼の前のどこかに見ているはずであるが、私が今眼の前に見ているのは机や紙であってそのどこにもそれとダブって昨日の会合の影のような姿が見えていはしない。B「思い出す」ということは見たり聞いたり味わったりというような「知覚する」こととは根本的に別ものなの

である。

しかし、風景の思い出はたとえ眼で見ることのできる映像ではないにせよ、とにかくその風景そのものではなく、それがわれわれに与えた何ものか、形見であれ痕跡であれ何か今もなお残留している何ものかなのではないか。他のことはともかく、その風景自体は過ぎ去って今は亡きものだからである。このように考えるならば<u>Cそれもまた一つの誤解である</u>と思う。

かりにこの考えにしたがって、われわれが思い出すのは過去の風景そのものではなく、その痕跡様のものだとしてみよう。例えば今私の記憶にあらわれているのは東京駅そのものではなく東京駅の影、東京駅の痕跡だとしてみよう。ここで大切なのは、この場合私は何ものの影ともわからぬ姿を思い浮かべているのではなく、まさに東京駅の痕跡があらわれていることである。それがたとえ痕跡であろうともその痕跡は東京駅の痕跡として思い浮かべられているのである。だとすれば、「東京駅の痕跡」というときの「東京駅」は東京駅自体でなければならない。さもないと、東京駅の痕跡の痕跡の痕跡の……といったことになってしまうからである。だがそうならば私の思い出の中にはすでに痕跡ならざる東京駅自体があらわれているではないか。そうならば東京駅を思い出すのに今さら東京駅の痕跡などは不必要ではないか。

この事情を普通の写真の場合から説明してみよう。ここにAさんの写真がある。それが「Aさんの写真」であることを私が承知しているためには私は写真ではないAさん自身を知っておらねばならない。それと同時に、ある記憶痕跡が「何々の痕跡」だと承知しているのならばそれはすでにその「何々」を承知していることである。そしてその「何々」自体をすでに承知しているのであれば、それを承知するために今さらその「痕跡」を必要としないのである。だから私が東京駅を思い出しているとき、私は東京駅の痕跡を通じて東京駅を思い出しているのではない。私は東京駅それ自身をじかに思い出しているのである。

しかし、では死んで久しい亡友を思い出すときもその人をじかに思い出しているのか、と問われよう。私はその通りであると思う。生前の友人のそのありし日のままをじかに思い出しているのである。その友人は今は生きては存在しない。しかし生前の友人は今なおじかに私の思い出にあらわれるのである。その友人を今私の眼や肌でじかに「知覚する」ことはできないが、私は彼をじかに「思い出す」のである。そのとき、彼の影のような「写し」とか「痕跡」とかがあらわれるのではなく、生前の彼がそのままじかにあらわれるのである。「彼の思い出」がかろうじて今残されているのではなく、「思い出」の中に今彼自身が居るのである。[D]<u>ある意味では、</u>

過去は過ぎ去りはしないのである。だから「痕跡」などを残す必要はさらさらないのである。

それならばわれわれの脳の中に刻まれた「痕跡様のもの」とは一体何なのだろうか。記憶は脳に「蓄えられる」ものではないのか。そうではないだろうと私には思われる。亡友を思い出すには私の脳の何かの機構が必要だろうし、その機構が(4)ハカイされれば私は恐らく彼を思い出すことはできないだろう。しかしそれは、何かを見るには眼球や網膜が必要なのと同じだと言えまいか。つまり、眼球は見るための器官であって今眼前に見えている机の姿が眼球の中にあるわけではない（網膜上の小さな倒立像は今私が眼前に見ているものではない）、それと同じ様に、脳の機構は何かを思い出すための不可欠の器官ではあるが、その思い出されたものがその機構の中に「蓄えられている」わけではない。だが、思い出すための器官である脳の機構が古びたり(5)ソンショウをうけたりすれば、当然「思い出し」にも障害がおきよう。老眼や乱視で物が見にくくなるのと同じである。そして、記憶がうすれ、記憶が失われることになる。

（大森荘蔵『大森荘蔵セレクション』平凡社、二〇一一年、二十一～二十七ページ「記憶について」一部改変の上、引用）

〔問一〕　傍線部(1)～(5)の片仮名を漢字に書き改めなさい。

〔問二〕　傍線部Ａ「「写し」の比喩には基本的な誤解がある」について、なぜ誤解なのか、「「写し」の比喩」が何のどのような性質を指しているのかを明らかにしたうえで、八十字以上百二十字以内で述べなさい。

〔問三〕　傍線部Ｂ「「思い出す」ということは見たり聞いたり味わったりというような「知覚する」こととは根本的に別ものなのである」について、知覚することと思い出すことの相違を述べなさい。

〔問四〕　傍線部Ｃ「それもまた一つの誤解である」について、思い出を「痕跡」ととらえることがなぜ誤解であるのか述べなさい。

〔問五〕　傍線部Ｄ「ある意味では、過去は過ぎ去りはしない」について、「ある意味では」とあるが、どのような意味で過ぎ去らないのか述べなさい。

〔問一〕

1	4
2	5
3	

〔問二〕

〔問三〕

〔問四〕

〔問五〕

第二講　解答

〔問一〕

1	2	3	4	5
淡	概	旋律	破壊	損傷

〔問二〕

「写し」の比喩は、過去の記憶の、元の風景と同様に目で見えるものとしての細部を持っているという性質を指しているが、実際の過去の記憶は風景とは異なり細部を見つめることはできず、忠実に写生することはできないから。

〔問三〕

知覚することは今目の前にあるものを感覚によって捉えることであるのに対して、思い出すことは対象が現在的な感覚を介さずじかにたちあらわれることである。

〔問四〕

「なんともわからぬ痕跡ではなく、ある対象の痕跡とわかって思い出しているとすれば、思い出している当の対象のことを既に承知していることになるので、思い出すための痕跡は不必要であるから。

〔問五〕

かろうじて脳に残存する、過ぎ去った対象の痕跡を思い出すのではなく、思い出の中に今存在するその対象自身を思い出すという意味。